

インタビューにこたえて

豊田市平和を願う戦争展実行委員会 代表委員 富田好弘

8月にエフエムとよたの番組「あさらぶ プレミアムインタビュー LOVE LINK (提供ひまわりネットワーク)」で、代表委員の富田好弘がインタビューにこたえました。「ラジオナビート パーソナリティの葵真弓です。ここからは、このエリアで活躍しているいろいろなジャンルの人にお話を伺っていきます。お楽しみに。……今週は豊田市平和を願う戦争展実行委員会の富田好弘さんにお話を伺っていきます」から放送は始まりました。

その内容を実行委員会で編集したものです。要約や省略と少し加筆をしています。

Q1 この豊田市平和願う戦争展をなぜおこなわれているのか、今回で26回目ということですが、その経緯をよろしかったら詳しく教えていただけますか。



1997年、「原爆は人間と共存できない」と広島に行かれた方が帰ってきて、自分の思いだけでとどまっていたはいけない皆さんに知らせていかねばならない、広島のこととは広島だけの問題ではないと、婦人3人が集まってほっと館で始めました。銀行のロビーや郵便局、高校などで広めること伝えることをしました。その思いがいろいろな団体や市民や戦争体験者に広まって今日に至っています。これが源流ですがもう一つあります。

その頃、竹村小学校の学芸会で6年生が「竹村でも戦争があった」という劇を毎年続けていました。私が知ったのは6回目ぐらいの時でした。それは昭和20年8月14日の昼ごろに名鉄竹村駅の近く北100mの所で電車が米軍機の爆撃にあったという事件のことです。乗客60~70人が死傷され、電車の中は血の海となりました。電車の中でも、竹やぶに運ばれてからも亡くなった方があり、けがをされた方はトラックで安城の厚生病院やそしてトヨタ病院に運ばれました。最初に駆け付けた近くに住んでいた星野さんが老人クラブで書かれた記録がありました。これらをもとに「竹村でも戦争があった」という劇になりました。これを知った私たちは平和をつなげていかねばならないと思いました。

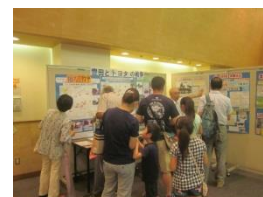
Q 今回が26回目。産業文化センターで開かれ多くの方が足を運ばれると思いますが、だいたい何人ぐらいですか。

700人から1200人ぐらいです。



Q2 このイベントといいますかこの戦争展を毎回を重ねるごとにご苦労も増えてくるのではと思いますが、そのあたりを教えてください。

豊田で戦争展を開こうとする場合、豊田市の独特の街づくり、変化と無関係ではないと思います。私が住んでいる竹村でも戦争中は500世帯だったのが今は7000世帯です。部落ごとにみると人口は13倍から18倍に増えています。逆に合併地域では減っています。そういう所で体験者や遺跡を探したり聞いたりすることは大へんな苦労がいります。



私達は戦争展と合わせて「平和リレー講座」を行っています。特定の地域を決めて1年間調査活動に入ります。資料を見る、体験者を訪問して直接お話をきく、遺跡を調査して、それを冊子にしています。その冊子を持って、毎年4月末の日曜日にその地域に出かけています。今年で13回目です。50人ぐらいで出かけています。この平和リレー講座の結果を戦争展で展示しています。



今年は稲武に50人ぐらいで出かけました。

その地域で戦争中にあったことが今住んでいる人に伝わらない、豊田市全体にはなお伝わらない、こういう豊田の事情の所でどうみんなの物にしていくかということで苦労しています。



来年は猿投に焦点を当てたいと思います。もう基礎資料はあります。高橋地域もしなければと思っています。



Q

その基礎資料というのはどういったところから集められるのですか。

1、公的な資料の分析。豊田市史、その地域の郷土史

や文献。

2、地域の遺跡や戦争にかかわるもの、忠魂碑や航空隊があった跡とか、爆撃にあった所とかを手繰っていくということです。

3、戦争体験者や遺族会の方々がまた知り合ろ分かってきます。



の方やお年寄りを訪ねいろいろなお話を聞きます。そのお年寄りを紹介して下さるといことのでいろい

Q3

だんだん、証言をしてくださる方は減っているのでは

非常に少なくなっています。今まで延べ230人の方の証言をいただけてきました。寝たきりの人も多いです。その中には語りたけれど語れないまま亡くなる方もいます。あの戦争を語ってほしい、伝えてほしいと思います。私たちはその気持ちを汲んでいきたいと思っています。

Q

でも、中にはまだまだ言いたくないという人のご意見は

あります。それは自分がした行為、国がやった行為を自分の子どもや自分の身内に語れないという人はいます。それは大きな意味で歴史を語れないことにつながります。

私は最近、手紙をいただきました。その中には、戦争体験者としてもう黙っているわけにはいけないと93歳の方が6月に一気に書かれた戦争体験記が入っていました。もう一つは、戦争体験を10年ほど前に絵文集にされたものです。これはお手紙をいただいたあと訪問し借りてきました。下町の曾我幸雄さんという方です。



(実行委員会 注：hpソ連抑留生活の紙芝居を参照)

語れないまま過ぎてきた方はたくさんいます。

(曾我さんの絵文集より) そのお一人、藤岡の元町長さんは、ずっと体験を話されなかった。教員となり教育長となったけれども現職中は語らなかったそうです。それは特攻隊の生き残りという後ろめたさからです。戦争が終わって家に帰る時もわざわざ瀬戸の方から山を越えてこっそりと帰ってこられたそうです。5年ほど前にお会いした頃やっと子ども達にもお話をされるようになりました。

小原の特攻隊の生き残りの方も、一切戦争中のことは話さずに来られました。墓場まで持っていこうと思っておられたが、私たちが訪問して初めて語られました。それをきっかけに母校の小学校で体験を話されました。

共通しているのは、戦死した仲間への思い、自慢話にしたくないという思いです。戦争中自分がやったこと生き残ったことへの後ろめたさがあり、自分の影の部分として残っているのです。

私の友人のお父さんは満洲で軍隊がばらばらになった時、農民の中に交じってにげて帰ってきました。お父さんが何をしてきたのか聞こうとしても話さない、お母さんも聞くなと言う。自分の人生を語ろうとしない。そういう風に生きてこられた方はたくさんいます。

戦争体験を聞いて残して伝えていくことはたいへん大事ことだと思います。あの戦争は何であったか、歴史を語ることの意義は大きい。

Q4

今回の26回の戦争展ですが貴重なお話が聞けそうですね。

戦争展のチラシを配ってから何人かの方から連絡がありました。

鉄砲の弾を持っているという下市場の人からの電話です。川に遊びに行ったら、弾がたくさんあった。家の人に話したら、触ってはいけないというので、火をつけて帰ってきた。朝鮮戦争の時に屑屋に売ったけど、まだ今、弾を持っているから、戦争展に持ってきてくれます。弾を拾った場所は九澄橋のちょっと上の方との事で、この話を聞いて思い出した話があります。

喜多町3人兄弟が川に遊びに行って弾を持って帰って、その弾が爆発し一人が亡くなったということを10年ほど前にその弟さんが戦争展にいらっしゃって話されたことがあります。それも同じ場所です。戦争直後に子供たちが巻き込まれた事件です。

藤岡の人で航空隊として朝鮮半島で戦い死にももの狂いで命がけで持ち帰ってきた水筒、水筒はいいのですが、モールス信号を打つ通信機(もう時効と思うからいうけど)を持ち帰りました。どうやって持ってきたのか彼の思いも。そういう命を懸けて持ち帰ったものがいっぱい展示されます。だから、それらは生きた戦争の事実を知る大事なことだと思います。私の思いで無く、体験した人の思いを私たちが汲み取っていく、私は昭和19年生まれですが、私たちがつなげなかつたら、事実接近せず勝手なことを言っていたら、事実を伝えることはできません。

Q5

今までお話を伺う中で豊田のいろいろな地名がでてきますね。豊田と戦争というのは教科書に載ってくるのも少なく歴史的に映画になるわけでもなく、ましてや本になるわけでもなく私たちが知る場面が非常に少ないような気がするのですが、豊田と戦争のつながりについてお伺いしたい。

全体としてつながらない。つながりにくいですね。

豊田市は1万7千人の挙母町から出発してそのときに1万1千人のトヨタ自動車国策でできました。1万7千人が5万人、10万人と増え今は43万人です。豊田の歴史を語る時に1本では語れないということになり



ます。



分かり易いので稲武町で言います。稲武は戦争中5千人ぐらいの所で280人が戦死しています。今2千人の人口です。そこで一生懸命、戦争体験を残そう、語り伝えようとした人がみえます。横山要三さんです。戦争中の様子を戦運動会で仮装行列にされました。兵士を送り出す時、勝った勝ったで提灯行列をした時、本土決戦に備えて竹やり訓練をしたこと、戦死されたお骨を抱いて帰った姿、そして戦後の苦勞したことを「70年前の出来事」としてやられました。戦争展実行委員会が記者会見をしたときに、横山要三さんが「あの戦争のことをわすれてもらっては困る」と仮装行列にした思いを語ってくださいました。

小原で藤岡で足助で旭で下山中、そのような形で残していくしかないと思います。

その地域だけで語るだけでなく豊田市民に分かるように語り伝えるのは非常に困難です。残念ながら豊田市には戦争資料館がないのです。ぜひ、つくって全体のことを残してほしい、伝えてほしいと思っています。

それから、終戦前日のトヨタ自動車爆撃のことです。3発の模擬原子爆弾パンプキンが投下されました。

1993年にトヨタ自動車が爆撃されたときの資料が出てきました。これを研究者が10年にわたって解明をして本ができました。

2003年、そのことを知られたトヨタ自動車最高顧問の豊田英二さんをご自身の「トヨタ自動車爆撃」に関する資料を私たちに提供してくださいました。その中に直接爆弾を投下した米軍B-29機長フレデリック・C・ボックさんから英二さん宛の手紙がありました。この機長は英二さんの英文訳著書を読み爆撃が事実と違うことを書いたのです。英二さんは「私はこの手紙で何が本当であったのか知った。」ということでした。



終戦前日の8月14日3時1分からトヨタ自動車をねらった3発の爆弾は単なる大型爆弾ではなく**模擬原子爆弾**で長崎に原爆を落とした部隊が実行したのです。

その手紙のコピーを私たちにくださいました。それを私たちが戦争展で公開しました。

これは非常に大事な話になります。豊田市史は「トヨタ自動車20年史」の豊田英二さんの間違っただけ受け止め方をそのまま載せているということです。(注：現在編纂中の「新修豊田市史」には模擬原子爆弾と記載)

8月14日、トヨタでは一人も怪我人はいませんでした。みんな避難をしていました。最後まで爆撃の様子を見届けた市古さんの証言をききました。私たちはこの時のいろいろな証言も集めています。

英二さんの書かれた本の中には「1週間後豊田と刈谷が焼け野が原になるところだった。戦争が長引けば第3の原爆投下も考えられていた」という意味の記述があります。大変な作戦の中に豊田があったのです。

(注：HP トヨタ爆撃の真相を参照してください)

Q6

今後の目標についてお聞きします。今、お仲間ほどのくらいいらっしゃるのですか。

20団体と20数人の個人で実行委員会を作っています。教員関係、婦人、戦争体験者、年金者、もともと平和をめざす人といろいろなかかわりを持った人が集まっています。

Q

年齢はどうか。

年齢は高いです。高いというか、職場のOB、60歳を過ぎた人が7割。若い人が少ないです。残念と言うか課題です。若い人の参加を、どのようにして関心をもってもらうか、今、平和を語る時期であるだけに苦勞

しています。

Q どの活動でも言われますね。若い世代が、若い世代がと。頭では分かっているのですよ。こういうことは大事だと。こういう活動は今後まだまだ続けられますか。

たいへん難しい課題です。続けている人たちがいたから続けることができました。今日も案内の葉書を書いたり募金集めにまわったりしています。(実行委員会 注：戦争展経費はすべて市民の募金です。)



そういう点でコツコツと平和をつないでいく、戦争体験者を探して遺跡を保存してそれを語り継いでいくという公的な努力がないと、個々の人たちの努力だけでは決してつながらないと私たちは強く思っています。

豊田市が平和の声を発信する世界に通じる国際都市であってほしい。

やっぱり自動車産業も私は平和の中でこそ人々の暮らしにもっとも身近に役立つ自動車として繁栄できるのであって、そういう点では、平和を守ることは

(26回戦争展子どもコーナー) 自動車産業の発展につながると思います。

難しいけれど個人の集まりとしては公的な取り組みになっていくように努力しながら、若い人たちにつないでいくように私たちもがんばりたいと思います。

(2013年10月 編集)